

会議録

会議の名称	西東京市公民館運営審議会平成22年度第4回定例会
開催日時	平成22年7月28日（水曜日） 18時30分から20時25分まで
開催場所	田無公民館 第2学習室
出席者	<p>会長：大島眞之 副会長：千葉桂子 委員：幸内悦夫、西嶋剛昭、定盛秀俊、古賀節子、須磨田純子、柴山隼、森忠、福島憲子、加藤真理 職員：相原館長、川口館長補佐、寺嶋分館長、小笠原分館長、玉木分館長、平井分館長、近藤分館長</p>
欠席者	渡辺文子、萩原建次郎、上田幸夫
議題	<p>(1) 第3回定例会の記録について (2) 報告事項 1 行政報告 2 事業計画書・報告書について 3 公民館だより編集室報告 4 都公連大会企画委員会報告 5 都公連委員部会運営委員会報告 (3) 協議事項 1 都公連のあり方検討委員会からの依頼事項 (4) 事務連絡および情報交換 (5) 次回の日程について</p>
会議資料の名称	<p>(1) 事業計画書 1 現代社会の子育てビジョン（田無） 2 シニア講座「心と身体をリフレッシュ」（芝久保） 3 子育てコーチングでママカアップ講座（芝久保） 4 江戸文字ストラップ講座（ひばり） 5 健康講座「経絡リンパマッサージ」（爽秋編）（ひばり） 6 女性講座「いざという時、すぐに対応できる護身法」（駅前） (2) 事業報告書 1 子育ては自分育て塾講座（芝久保） 2 アロマセラピー講座（芝久保）</p>
記録方法	<input type="checkbox"/> 全文記録 <input type="checkbox"/> 発言者の発言内容ごとの要点記録 <input checked="" type="checkbox"/> 会議内容の要点記録
傍聴者	無し
会議内容	
<p>○会長： 定刻につき、開会する。</p> <p>(1) 第3回定例会の記録について</p> <p>○副会長： 記録の修正についての申し出等を確認する。</p> <p>○職員： 特になし。</p> <p>○副会長： 配付した記録のとおりとする。</p>	

(2) 報告事項

1 行政報告

○副会長：
報告を受ける。

○館長：

7月1日付で人事異動が発令され、4月時点の欠員2人については補充された。欠員については1日付で新規採用の職員2人で補充され、そのまま柳沢公民館の配属とした。それに伴い、若干の課内異動が伴うこととなった。各職員の配置については、配付の名簿のとおりだ。また、駅前公の山本主幹は、市長部局に出向となった。

(新任職員自己紹介)

○副会長：

質疑を受ける。
特になければ、終結する。

2 事業計画書・報告書について

○副会長：
質問・意見を受ける。

○委員：

芝久保公のシニア講座だが、福祉センターの調理室は狭いが、大丈夫なのか。また、陶芸サークルが多く登録しており、講座終了後にサークル化を希望した場合、対応は可能なのか。既存サークルとの軋轢が生じる心配はないのか。

○職員：

芝久保には調理機能がないので地域の施設を借用した。参加者数をこの部屋の定員にあわせているので問題はない。陶芸サークルとの関係だが、この講座はさまざまな体験を通じて生きがい探しをすることを目的としており、陶芸講習会ではないので、サークル化を目指すことはないと思っているが、もしも陶芸に強く関心を持つ人がいた場合には、既存サークルへの入会を勧める。

○委員：

保育付講座の定員は保育の定員と異なるが、保育室の定員はどう定めているのか。

○職員：

部屋の大きさと、保育員の配置人数によって制限している。柳沢のみ部屋の定数は18人になっているが、実際には保育員の配置の関係で他館と同様に15人定員で公募している。

○委員：

芝久保公のママカアップ講座に大変興味を持った。保育付講座でありながら、小学生を育てている母親にも枠を広げているところが良いと思う。現在、その世代の母親の中でも、実際にカウンセリングを受けていたり、子育てについて興味を持つ人が多くなっている。相互に学ぶことで、人間関係が広がるのは大変良いことだと感じている。小学校側としても、地域の施設でこうした学びがあることを心強く感じる。

○副会長：

他になければ、終結する。

3 公民館だより編集室報告

○副会長：

報告を求める。

○委員：

7月7日に開催した。

6月号1面で取材したシネマクラブの代表からお礼の連絡があったとのことだ。公の広報紙に掲載、評価されたことが功を奏し、映画配給会社からの見方に変化があったそう。社会的に認知されている活動であることが認められ、フィルム借用時の交渉が容易になったということだ。

7月号の反省は、大きな点はなかった。

8月号1面は平和特集として「あなたにとっての平和とは」というインタビュー記事になる。また、2面3面の講座の記事量が多くなるときに、記事が見やすくレイアウトできるよう工夫が必要になるのではないかという意見があり、研究することになった。

9月号1面は、日本インドアプレーン協会の野中さん取材予定だ。

○副会長：

質疑を受ける。

特になければ終結する。

4 都公連大会企画委員会報告

○副会長：

報告を求める。

○委員：

7月16日に第4回の企画委員会が小平市で行われた。

大会テーマについては先月の報告のとおりであるが、これに伴う趣旨文を調製し、成文化した。今後は全体協議から分科会単位での活動に移ることになる。大会テーマや趣旨文を踏まえた内容の分科会を構成したい。

○副会長：

質疑を受ける。

特になければ、終結する。

5 都公連委員部会運営委員会報告

○副会長：

7月17日に開催した委員研修会参加者から報告を求める。

○委員：

公運審の役割についての話も参考になったが、公民館のイメージについての世論調査の報告を受けた。市民の公民館に対するイメージは、親しみやすいが、暗く、活気がない、しかし公的に運営されているという信頼感はある、というものらしい。そのイメージの要因としては、いまだに30年前の事業を繰り返し、学習内容についても公民館でなくても良いのではないかというものが多いからだろう。公民館であるのなら、講座に参加することで社会貢献につながるような内容のものを精選すべきという言葉が耳に残った。

公民館という施設のキーワードとしては、憲法と法律に基づいた施設であるということをしちんと市民にも理解してもらう必要があるということで、こうしたことから市民力を向上することが重要とのことだ。さらに、公民館だよりに市民の意見を取り入れる工夫も必要とのことだ。公運審委員は、

その活動はもとより、市民と共に勉強会を行うことも必要とのことだった。

講義の後にグループに分かれて情報交換をした。各市の有料化についての意見交換をしたが、いったん有料化を選択したが、市民の力で無料に戻すことをスタートした市の事例も聞いた。肝心なことは、学習をするだけでなく、それらを社会に還元し、活用できる方法を同時に学ぶことが公民館の学びということだろう。

○委員：

重複を避けて報告したい。公運審の活動についての検証をみずからもっと行うことが重要で、自治体の課題を認識することはさらに重要であるという。その理由は、館長から受けた諮問に対する答申が、市の政策にどう生かされているのかを検証し、生かされるように委員として発言することが必要だという、講師からの示唆が印象的であった。

○委員：

公運審の活動を公民館単位で職員と共に学ぶことが重要だということも学んだ。任期中に答申を1つもしないというのは公運審の役割を果たしていないということであり、仮に館長からの諮問がないということであれば、お願いしてでもそうすべきだと聞いた。公運審としての発言は積極的に行うべきだということも学んだ。

埼玉県の春日部や新座では、公民館に関する要望を議会が開かれるたびに提出しているということも聞いた。

○委員：

先ほどの発言に補足する。有料化のことだが、受益者負担の名目で徴収するようわずかな金額の問題ではなく、財政難の折、公民館を含めてどのように健全に市政運営をしていくのかという視点ということだ。

○副会長：

税金をどこに投入し、どこを削ったらよいのかということを中心に議論するということだと認識したい。

質疑を受ける。

特になければ、終結する。

(3) 協議事項

都公連のあり方検討委員会からの依頼事項

○会長：

依頼内容について説明を求める。

○職員：

4月の都公連総会において、新会長からの提案で「都公連のあり方検討委員会」が設置され、既にこれまで3回の会議を重ねている。この委員会の設置に関してだが、会からの脱退を表明する市が出るようになり、実際に数市が抜けている。その理由については、公民館の看板を降ろすのを機会に脱退、会費を予算計上できないことを理由に脱退、会長市や都公連大会事務局市の負担が重過ぎるという理由にての脱退と、幾つかが上げられている。

こうしたことを受け、従来どおりの活動のままでは先細りになる一方の会の運営を憂いてのことだ。

6月25日の会議の席で、市の負担が重いといわれている都公連大会の存続についてが議題になり、配付した議事録にもあるとおりで、各市の委員からさまざまな論点の意見が開陳されたために、委員会としての方向性が示せなくなった。公運審と同様で、議決機関ではないために賛否を多数決で決めるという委員会の趣旨ではないために、ここは、大会参加者でもある職員や公運審委員から多くの意

見を直接聞いてみてはどうかということになり、本日お願いしている。

数多く聞きたいと思うが、単に存続・撤退という意見だけではなく、必要であるのならどこをどのように改善すべきなのか、仮に不要、または役割を終えているということであるのなら、それはなぜで、それに代わる提案などがあれば具体的に示してほしい。既に職員からは26日の職員会議の席で聴取しており、賛否両面からの意見が出ている。

○会長：

まずは一通り意見を述べてほしい。

○委員：

企画委員を2期連続で受けた経験があるが、当初は大変負担感もあり、遠くへ出かけるのも大変であったが、毎回出席するうちに私の勉強になった。所属する自治体から出てみないとわからないことが沢山あり、企画委員の研修になると思う。

ただし、自分の市で事務局を受けるとなるとそれは大変なことになると想像がつく、特に職員の苦労は多いと思う。それでも、専門職や永年公民館に勤めている職員がいる市は、核になると思うが、配属1、2年の職員だけでは、事務局として大会を仕切るのは難しいと思う。現状は輪番で受け持っていると思うので、複数の市がグループを組んで仕事を分担してはどうか。結論としては、さまざまな工夫をしてでも、大会は開催してほしい。

○委員：

昨年はじめて参加したが、何とか他市の情報を収集しようという意気込みだった。参加者の中には4月から公民館に配属になったという職員がいた。それらの人の中には、参加することにすら大変負担を感じるという意見を述べる人もいた。関係市民や公運審委員は参加意識の高い人がほとんどと思うが、職員の中には偶然公民館に異動したという人やこの職が適材でないと感じている場合には、大会に参加する意義を感じることも難しいと思う。ただし、公民館活動が危機に瀕しているということを感じられる機会なので、そうした人にも積極的に関わってほしいと希望する。そのためには、継続のための負担軽減が課題になる。

昨年の大会に参加して、東久留米市がなぜ脱退することになったかということも情報交換の中でよく理解できた。こうした機会をなくしてしまえば、参加することも不可能になるということなのだろうか、と自問している。

○委員：

連合体がなくなると公民館の必要性や統一した考え方がまとまらなくなると思う。都公連がなぜできたのか、その理由を考えるべきだろう。組織の必要性を問うときに、メリットのみで論じていると、それが少なくなればなくすことしか選択肢になくなる。しかし、連合体がなくなれば、他市との比較も俟たなくなるのではないかと。財源の問題や人間的な負担感だけで判断せずに、組織をなぜ立ち上げたのかという根本に立ち返って考え直してほしい。公民館がなくなるとすることは、市民にとって大変マイナスに働くことと考える。

○委員：

大変難しい問題だと思う。既に所属する自治体が14市町ということは、多摩の自治体の半数しか加盟しておらず、過去に脱退した市の中には公民館の看板を外したところもある。公民館というよりも、社会教育存続の危機ということなのだろうか。都内の自治体の場合、市と区では状況も異なるが、まだまだ公民館の役割は終わっていないと思っている。

市民個人のスキルの向上は大切なことであるが、コミュニケーション能力や地域に住む相手のことを知ろうとする社会教育の営みはもっと大切なこと。それを確認するための公民館大会は、大変大事に思っており存続は必要と思うが、その解決法についてはまだよく理解できていない。

大会は、職員と関係市民が同じテーブルについて話し合うというメリットがあるが、どこが事務局

になっても負担があると思うし、西東京市の公民館職員とて例外ではないと思う。その時には公運審も一緒に考えなければならないと思うし、そうでなければなるまい。これからは、より以上に市民が支える力をつけることが大事だ。

○会長：

昨年度委員部会に関わっていたため知り得たことであるが、14市の中でも既に脱退を表明している自治体もある。西東京市はその中においてもまだまだ力が残っている市と考えている。

○委員：

公運審や市民の公民館に対する意識レベルが、各市の公民館の存続に対する見解とリンクする部分があると思う。西東京市の委員の意識レベルならば、十分大会を受けられるものと推測する。費用の問題にしる、人的な負担にしる、公運審が同時に負担するというのを各市も考えてくれるとよいと思う。

○委員：

大会は開催してほしいと思っている。職員は、さまざまな研修に参加していると思うが、大会と研修の差をどう考えているのだろうか。また、職員として大会に期待するものは何か。新任職員が出席しているので質問したい。

○職員：

今年はじめて参加することになるが、今も仕事の中で他の市の公民館だよりを目にする機会が多いが、いろいろな学級・講座の情報を目にするのと担当者に目的や意図を聞いてみたいし、それが楽しみである。

○委員：

私も昨年企画委員として小金井市の大会準備を手伝ったが、確かに企画委員の勉強会の色彩が強い。一緒に関わった若い職員の感想を聞く機会があったが、他市との交流で目から鱗の体験をしたということやら、今後のやる気につながったということなども聞くことができ、頼もしく思った。毎日の仕事に追われる中で職務への自覚を持つというのは難しい面もあるが、企画委員会のような非日常の場で触発されるということは、容易に理解できることだ。大会は、関係者が一堂に会するということに意義があると思う。それに対して研修会は、個々のレベルアップの場であり、おのずと役割が異なる。

西東京市からの参加者数は、都公連大会も関東ブロック大会も、毎年上位に位置しているが、これは市が条件を整えてくれている面も否めない事実だと思う。各市も、参加に向けた条件を作ってくれば参加者が増えて活発になるのではないかと。

○委員：

企画委員として始めて参加したとき、いろいろな意見の職員や委員がいて圧倒された。また、都公連の研修会にも参加しているが、他市の職員に素晴らしい意見の方がおり、触発されることも多い。

ところが、過去2回の検討委員会の議事録を読むと、どうも実態は逆のようだ。少なくともやる気があるのならば、少々のことはカバーできると思うが、大会の存続も公民館を良くしよう、利用者を作り上げようという気持ち次第だと思った。もちろん、負担をできるだけ少なくするという決意は必要だと思うし、事務局市だけが苦勞するということがないようにしなければならないのは、当然のことである。

○委員：

各市の意見を読んでいて感じたことは「負担」という言葉でくくられているが、いったいどういう種類やレベルの負担を感じていて、それを払拭するためには何が必要なのかが述べられていない。具

体的に負担に感じている内容がわからないことには、その軽減策を講ずることもできないのではないか。

○委員：

昨年の大会に参加してみて感じたことは、研修会の意味合いが強く、自己の意見を述べる機会が少なかった。大会出席後にこの席でも述べたことだが、あの趣旨の大会ならば開催する必要は感じない。各市の参加者は意見をまとめて大会に臨んでいるのだろうに、それを述べる場が設けられていない。昨年の大会でも、多くの方は昼休みに盛んに意見交換をしながら、午後講師が一方的に話すだけだった。少人数で話し合う場がなく、こうした考えのズレが、脱退したいという意識につながっているのではないか。

関ブロ大会でも同じ感想を持った。大学教授が経験談を話しているばかりで、討議の時間もろくになかった。それでも私は、質疑応答の時間に自分の意見を述べさせてもらったが、それも一方通行であった。そもそもディスカッションをする時間は考えていなかったと思われる運営であった。もちろん、準備を重ねて用意された事例報告なので聞きやすいのだが、それが実践で通用するのかは疑問に感じた。であれば、そうした疑問を交流させる時間が必要だと思うし、それが多くの人が集まる大会の良さだと思う。

誤解ないようにしてほしいが、大会不要論ではない。魅力ある大会にしないと参加者の満足を得ることができないのではないかという趣旨の発言である。

○委員：

今の発言からすれば、話し合いを求めている人にとってすれば、大会に研修会的な要素は必要ないということなのかと思う。私の認識では、研修は職員のためにあり、大会は市民のためにあるのではないかと思っていた。となると、大会への市民参加が少ないから満足度が落ちるのではないか。せっかく大会を実施するのであれば、参加者の意見を集約する方向に持っていくべきだろう。人が多く集まり、その中で議論を揉んでいけば役立つことは非常に多いと思う。

また、負担感についてだが、負担があったとしてもそれを上回る実益があれば許容できるのだろうと思う。または、どうしても無理というのであれば、輪番ではなく、体力のある市が事務局を行うということにしてはどうなのか。

○委員：

事務局が可能と思われる市が、2～3年連続で行うということが可能なら、そうしたらよい。輪番は公平に思えるが、1年交代だと学んだことを生かすチャンスもなく、次の市が負担感だけを感じる原因を作っているのではないか。輪番制のルール自体も考え直してはどうなのか。

○副会長：

市民参加を求めるテーマを考えてみてはどうなのか。現状の市民参加の度合いは。

○職員：

当日参加者の中には、公運審委員以外にも関係市民が自費で参加してくれているが、その数は全体から見れば僅かだ。さらに、企画委員への市民参加になると、こちらはほとんどないのが現状かと思う。

○委員：

開催市によっては、本当に若干名ではあるが、公運審以外の市民が加わっていたこともあったと認識している。

私たちも、公運審の任期が終わってしまうと、職務としての参加はなくなってしまいが、個人的には引き続き関わっていきたいと思っており、そのときの受け皿は重要かと思う。

○副会長：

大会をやめてしまえば、次に失うものがまた論じられ、次々に縮小され、終いには公民館そのものが先細りしていくような道筋が見える。

○委員：

常識的な判断として、研究大会を存続させるのなら都公連から脱退したいという市にとってみれば大会は必要のないものということなのだと思う。必要だと感じているのなら、何を差し置いてでも残ってくれると思う。仮りに抜きたいという市が多く存在しているとすれば、必要性が乏しいからということになってしまう。その必要性だが、時代にそぐわなくなったからなのか、大会の趣旨や内容がマンネリ化しているからなのか、逆に必要と思わせるにはどうしたらよいか。公民館の未来のために本当になっていたのか。職員に委ねるばかりでなく、各市の公運審もよくよく研究すべきと思う。やめてしまうということになる前に、何か対策を講ずるべきだと思う。負担を減らす工夫というが、誰も自分の利益につながらないことには熱心にならないのは常ではないのか。そこをどうしたら良いかを検討すべきだろう。

私は、大会はなくすべきではないと思っているし、何か弊害があるのであれば、都公連は、それをきちんと探すべき組織であってほしい。そうでないと各市の予算もどんどん減らされる一方だろう。必要な部分にはきちんと税金を投入すべきと思っている。社会教育の本質である「地域づくり・再生」はその必要性を各地で叫ばれているが、どこでも言われることは、予算はないけれど発展させてほしいという願いばかりだ。そもそも予算のない事業はあり得ないのが原則であり、こうした現実には、市民も声を出すべきと思う。

○会長：

暫時休憩する。

(20時00分休憩)

(20時05分再開)

○会長：

再開する。

○委員：

補助金・負担金に頼る団体の宿命なのか、同じような組織である校長会においても自治体からの負担が尠ならないので退会したいという区市が出ており、都公連の実態と同じであったことに驚いている。私は、こうした大会の存在は必要と思っている。参加者と公民館活動の意義を確認し、それを市に伝える場だと思う。また、都公連のような組織は、上部の関東ブロック公連や全公連を通じて文部科学省との交渉なども行っていると思う。そうしたメリットを脱退していく市にも伝えてはどうか。

輪番での事務局負担は厳しいと思う。事務局は、体力のあるところが負担しながら進めた方が良いのではないかと。全国組織レベルの事例になってしまうが、事務局については比較的組織の大きい東京が受け持ち、大会当番は会場費用の安価な地方都市が受け持つという了解が得られて、負担しあっている。

○委員：

いろいろな人の交流が見込まれるのが大会の意義だと思う。これが大事だ。また、小さなユニットでの話し合いが実を結ぶことになろう。

大会事務局はブロック制が適当だと思う。その組み合わせを考えてはどうなのか。メリットとして、ブロック内で助け合うことで、情報交換も自然にできると思う。

○委員：

事務局の輪番制についてだが、体力的に可能な市がまかなうという案については偏りが出る懸念があり賛成しかねる。むしろ、近隣数市でグループを組んで対処する方が良いと思う。例えば、西東京市は隣の小平市と組むというようなことだ。そうすると4～5年に1度は会場当番が回ってきてしまうが、それも致し方ないと思う。

○職員：

本日の提案にも、具体的に試してみないと答えの出ない方法も含まれている。グループ制などは、過去に取り組んでいながらやめてしまったものであり、復活の可能性は高い。ただし、負担の軽減も望めるが、連絡調整という新たな負担が出かねない、さらには隣接市というだけの組み合わせで共通の認識が持てるか、などクリアしなければならない課題もある。しかし、一步を踏み出さないとならない事項なので、この意見を検討委員会で述べたい。西東京市は、職員も委員も一致して大会の存続に向けた改善策を講ずるべきという意見に集約したい。

○会長：

他に意見がなければ、議論を終結する。

(4) 事務連絡および情報交換

○会長：

事務連絡はあるか。

○職員：

特になし。

○会長：

館長に申し上げたい。そろそろ諮問を用意するよう申し入れたい。

(5) 次回の日程について

8月25日（水曜日）18時30分

於：田無公民館 第2学習室

○会長：

他に意見がなければ、閉会とする。